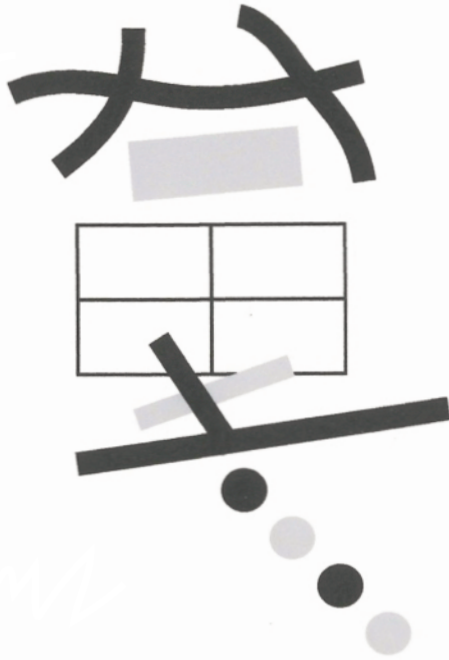

月 刊

Mélange

vol.70



2012.04.29

詩・エッセイ

追悼・吉本隆明

月刊『Mélange』 VOL.70

2012/04/29

月刊めらんじゅ編集部

特集 追悼 吉本隆明

いてくれるだけでいい……

富哲世

（娘よく視な いま見ているのはやがておれの死顔だ）（吉本隆明「母の死—死は説話である」より）

「としよりは同じはなしばかりで情けない」という吉本隆明に、娘よしもとばなは「そんなことはいらないだけで嬉しい」と応えたそうである。この返答にはもちろん家族愛がある。そして人の宿命に対する受容と覚悟がある。なくしてはじめで知ることや、気づくことの普遍的な先取りもあるだろう。そして居なくなられてみれば、わたしにとつてもまたいつのまにか、その人は、そこにいてくれるだけでいい存在となっていたのだ。迂闊なことに。

『もし自分の意識の根拠といま見ようか、あり方といま見ようか、それを信じていることができれば、多分その人は、宗教的な、まていくかどうかは別として、（信）の側の人だというふうに見えるわけでしょうし、ぼくは自分が（信）の側に立ってないというふうに見えるのは、どうしても最後のところで自分が自分の意識の存在の仕方と

いうことをあまり信じてない……」（「親鸞の（信）と（不信）」より）

理念としての（信）と（信じること）がわたしのなかでうまく結びつかないのは、わたしもまた「不信の徒」であり、（信じること）がよくわからなからだろう。わたしには「帰依すること」への渴望がある。けれども深くそうならないのは、要するにそれだけの出会いがないということだけなのかもしれないが、やはり意識の根つこのところに、どうしても腑に落ちない自己存在のありようがあるのだ。この根深い（不信）の、弱さ、迷い、優柔不断さは、「私は今の、この、現世の喜びだけを信じる」（太宰治「駆込み訴え」）の延長線上にあつて、その（信）のためにのみひたすら現実を幻想化し、虚構化して一時の喜びの脚本に執着する。それはいつ潰れても仕方のない頭も尾っぽもない蛇のようなものであり、その自己演技によつて本質的に愛する者への裏切りを内包するものであつて、それゆえわたしはわたしの内なる（死）を、（不信）の域から、空無へと変転させることができないうのだ。これがおそらく、わたしの（不信の構造）の現象学というものであるが、もしわたしにとつての（信）が、この自己不信と葛藤しながらもなお、それがあればかろうじて生きていけるというふうなものであるとすれば、それは「そこにそのとききみがいた」ということに尽きる。それは何か、かけがえのなさ、のようなものなのだ。

吉本さんの生涯は、知としての（不信）を、理路としてどこまでも突き詰めていこうとするものであつた。そして有限な存在として、次第に肉体的・生理的に衰えていって、同じ眠りとはいえない眠りの中身はちがうように、その内面ははかりしれないが、「大衆の原像」で考えた価値あるものの姿そのものようになっていくことの一一致が、存在

初には正面に向けられた視線が、熱がこもつてくるにつれ天井に向けて上昇していくのである。その凝視する眼が強烈な印象を残した。「希望を語る」とと絶望を語ることが同一な認知の地平」（映像の終わりについで）と語る精神を見た思いがした。

その視線の行方に触発されて『ハイ・イメージ論』を読んでみた。80年代に吉本隆明が出版したものの中に、このほかに『マス・イメージ論』がある。吉本隆明にすれば珍しく身の回りでの劇的に展開するサブカルチャーを題材にしているシリーズだ。『共同幻想論』が国家論であるとするならば都市の空間に偏在している亡霊のような存在を書いた「都市論」だと言われている。私は「ハイ・イメージ論」の冒頭に書かれた「世界視線」というイメージによく分からないながら魅かれるものがある。「世界視線」を要約すると、瀕死や仮死の経験をした人間が、死につつある自分の肉体とまわりのことを上からの視線で見下ろしているという視覚的な体験から発想して書かれている。もう一つはその像体験をコンピュータ・グラフィックによる立体的なシミュレーション映像と人工衛星ランドサット映像に類似しているとして、「世界視線」の果たす意味を説いている。引用するところのように述べられている。

——ここには宇宙空間からの世界視線のもつおきな未知の特性があるようにみえる。——省略——人間ははじめて、自己の存在と営みをまったく無化してしまいがちで、しかも自己存在の空間を視る視線を獲得したのだということだ。——（地図論）もう一つ引用すると、その「世界視線」の背景に高度情報化の「社会像（マトリックス）」が生み出した視線に触れた箇所がある。

——おなじ資本制の高度システムであり、おなじように生産手段の高度化の一齣でありながら「高度情報化」と「高度機械化」とはどこがちがう

のか。「高度機械化」は生産手段の線形につないだ総和（総合）せ表象されるが、「高度情報化」は線型的なマトリックスでシステム（総合）が表象される。——

「高度情報化」の社会像は、映画「マトリックス」の架空の社会システムを想像すれば比較的に理解しやすいと思う。ともにジャン・ボードリヤールのシミュレーションズムとの親和性をもっているようだ。それにしても難解な表現である。

さて、私の掲げている「ファッション論」に話を進めたい。ファッション論は出発点からその異色さが際立っている。それは「東京国際コレクション・85」のコムデ・ギャルソンの川久保玲が見せたファッション・ショーから始まるころだろう。モデルを「人種がちがう」、いや「人類がちがう」と思う衝撃的な体験が題材になっている。

それにしてもファッション論に挿入された図の特異さは他のものを圧倒している。なかでもファッション誌「アン・アン」から採取した裸身をカラストロフ理論の「アトラクタ」と「リペロ」のポテンシャル線と分岐線で表現した図などはよく分からないながら、位相学までファッション論にとりこむ吉本隆明理論の壮大さを充分に印象付ける。

言うまでもなくファッションは着るものと、見られることが同一のコード上にあることを前提としている。つまりシャロロック・ホームズが人物観察において、彼の服装から小さな汚れや、匂いでその人物像を、さらになぜここにいるのかを推理して見せたように、視相学（探偵学）に近いものがある。それはヘーゲルが言うところの「思いこまれた内面との関係」を見るところにファッションがあるのだろう。ファッション論は哲学の認識論を踏まえて展開していく箇所がある。サルトルが蒼蒼るほど衝撃を受けたテーブルの上のありふれた物体のあり方について言及した新しい認

の到達点であり、思想の到達点でもあつた。吉本隆明の実存と思想の最大の一貫性は、そのことの辻褃の合わせ方にあつたのではないだろうか。それは不思議な幻想であるような気もする。猫好きな者にとつて「結局人間様よりこの子が一番偉い」という感懐はだれでも抱きうる思いである。「大衆の原像」の奥にある価値の普遍性とは、根拠なく成立するその偉さのようなものではないだろうか。そこにいてくれるだけで偉い。いてくれるだけでいい。それから死は、その死顔を越えて、おそろく、わたし達のなかを旅していく。

吉本隆明著「ファッション論」

（「ハイ・イメージ論」より）

高谷和幸

私は一度だけ吉本隆明の講演を聞いたことがある。2009年の話で、現代詩手帖創刊50年祭「これからの詩どうなる」というイベントが新宿で6月20日にあつた。その第二部の冒頭に瀬尾育生が聞き手というかたちで吉本隆明の講演が進められた。車椅子で壇上に登場したその時から不思議な静けさと聞き漏らすまいとする熱気が会場を変えてしまったのをはつきりと覚えていて。話の内容は詩を書き始めた体験から始まり、どうも私の浅い知識ではその話題となる世界を理解できたとは言えないが、「詩はこれからはと変わらぬ」という趣旨の話だつたと思う。その時の吉本隆明の体力から言えば長い時間をあれだけ熱弁をふるわれて大丈夫か、と心配するぐらいだった。しかも最

議論と、同等の意気込みで書かれている。本文から引用する。

——スカートが膝のうえでとどまっていたり、足のくるぶしを覆うほどに長くなつたりするファッションの現象に、言葉をもてるようになったことは、どんなに驚いても驚きすぎることはないほど、重要なことなのだ。現在に視座をすえるかぎり、おおよそ人々の常識になつてきている価値観は、根こそぎ転倒されてしまふべきなのだ。——

80年代はパニコレとならんでギンコレで日本のファッションが世界の中心になつた時代である。日本が世界に発信する構造は吉本が書いているように西洋的なファッションのデザイン、色の組み合わせ、素材まで徹底的にその歴史を学び、自分の体の一部にまで消化したうえで展開すること、その構造は程度の差があつても「芸術」の世界で日本の芸術家がやってきたことである。それが発信の中心になることは見られる側の「ジパング」を三浦末雄が言うようにツパメ返的に日本を切り開いて見せることであるように思う。

ファッション論はほぼ同時期に出たロラン・バルトの「モード論」と、後に出版した鷲田清一の「モードの迷宮」とも違う視座を持つている。ファッション論は先に書いたように「世界視線」という「高度情報化」のもたらした都市論のなかの映像論の延長にあると思う。ファッションも映像の一つであることに違いないだろう。その映像について吉本隆明は「映像はすでに（死）のちかくあるいは（未生）の胎内から逆に照射される究極の像（ルビ・イメージ）価値の概念を産んでいる」と語っている。映像自体は意味もなく、雑多にパソコン上に無数に存在していて、そして等しく忘れられてしまうものだが、高度情報化した映像の本質を表現したこの言葉は、現在も色あせてはいないと思う。

日本中の大学が学園紛争で騒然としていた一九六八年、『戦後日本思想体系』全十六巻の刊行が始まった。版元は筑摩書房で、編集・解説者には、あらゆる学問領域から文芸・芸術までを横断して、吉本隆明・丸山真男・橋川文三・梅原猛・加藤周一・高橋和巳・小田実といった名だたる論客がずらりと顔を並べていた。私は丸山真男や橋川文三、加藤周一に強く魅かれていたから、大学生協の本屋でしばしば立ち読みをした思い出がある。

この「体系」がとりわけユニークだったのは、「経済的思想」に、その頃飛ぶ鳥を落とす勢いにあつたダイエーの総帥・中内切の『わが安売り哲学』が収録されていたことである。

中内は太平洋戦争末期の激戦地・フィリピンで地獄のような飢餓体験を味わったのち、復員した神戸の闇市で密輸入のペニシリオンを売りまくり、それを元手に流通・小売業界に殴り込みをかけ、それまでの商慣習やときには法秩序さえ無視して「安売り」を看板とするダイエー王国を築いた男である。この中内の栄光と失墜を、佐野眞一の『カリスマ 中内切とダイエーの「戦後」』（新潮文庫で上下二巻）は、戦後日本の復興から高度経済成長さらには地価高騰とバブルの崩壊に至る歴史に重ねながら、中内の内部に荒れ狂う情念の暗さに錘を降ろすことよって見事に描き出した。「エピソード」に記された次の文章は感動的ですからある。

：神戸国鉄高架下のブラックマーケット跡を初めて歩いたときのいい知れぬ感動を思い出す。「戦後」のおいそまだかすかに残すこの路地にはかつて無数の中内切がひそんでいた。しかし、そのなかで中内切になれたのは、たったひとりの男だった：

『わが安売り哲学』とは、いかにも通俗的なタイトルだが、内容は激越である。

その主張を一言で要約するならば、これまでメーカーによって握られていた商品の価格を消費者の代弁者である小売業者の手に奪い返すというもので、中内は「コスト主義に基づく価格をバリュウ主義に基づく価格に置き換えることが、われわれ革新的流通業

吉本隆明と中内ダイエー

者の使命である」と高らかに宣言する。メーカーがどんなに高くコストをかけようとも、消費者の購買意欲がその価格に届かない商品に価値はあるのか。価値は消費者が付与するものであり、価値を価格という形で実現するのが小売商なのだ。これが寡占メーカーへの殴り込みでなくて何であろう。

ここまで述べると、吉本隆明が、この破壊的・革命的商人に喝采を送った理由がはっきりと見えてくる。強欲な関西商人と反体制の思想家・詩人の取り合わせは、一見不思議に映るが、中内が青年時代にマルキシズムの洗礼を受けていたこと、さらに苛烈極まる戦争体験が中内をして国家なるものに底知れぬ不信任を抱かせたその経歴が、軍国少年から転向した吉本にとって、憧憬の要件であつたろうし、既存の価値秩序への果敢な挑戦が二人を結びつける紐帯となりえたのであろう。中内の文章はマルキシズムの片言隻句をちりばめた、粗悪なアジテーションの見本のようなものだが、それでも革命的商人たらんとする熱い思いは伝わってくる。

「現実の世界的中心的存在である価格を破壊することは、現在の社会秩序を破壊しながら新しく創造していくことを意味する。つまり革命である。革命とは天の命による権力者の交代である。

現在の流通部門を支配する者は生産者であるが、現状にあきたらず革新をめざす流通業者は、生産者その権力の座からひきずり落とし、流通支配権を流通業者の手に奪い返すことをめざしている。そして革新的な流通業者は、その背後に目ざめた消費者、大衆の支持をうけることによって革命へのプロセスを歩む。これが流通革命である」

これは吉本隆明が唱えた「高度消費社会論」と見事に平仄が合う。高度に発達した消費社会では、政治経済の主権が個々の消費者に移り、やがて個人を支配していた国家は溶解の道をたどる。すなわち資本主義は超資本主義によって克服されると予言した吉本は、その当否は別として、価格破壊を公然と掲げて既存の秩序を重戦車のごとく蹂躪する中内ダイエーに、資本主義克服という歴史的使命の体現者を見出したのである。

で提供したのではなく、販売したのである。ここに私は、中内の商人としての鞏固な信念を見る思いがする。

無論批判がなかったわけではない。オートバイで神戸に入りボランティア活動に従事した作家の田中康夫は、こうした非常時になお物物を売る行為を「強欲」と決めつけたが、果たしてそうだろうか。避難所で無償で食料を配給することは、江戸時代の「御救い米」から続く「官」の役割なのであつて、商人がタダで物を施すのは、佐野眞一も書いているように、「市民社会の契約の精神から逸脱した行為」ではないか。私はボランティアとして献身する人たちの善意と誠意を疑う者ではけつしてないが、それをことさら美談に仕立てて、一種の社会的強制力をつくりあげてしまふ言説には違和感を抱く。その点、吉本隆明は中内ダイエーのこの行動に対しても、明快な賛意を表していた。

吉本は言う。

「日本のマフィアという仇名の山口組は、ただで物品を配った。『ダイエー』はそれなのに必需品を安価ではあつても金銭で売った。それを批判する者もあつたが、商人は売るのが当然だ。それをくずしてタダで配っても被災者三十万人にゆきわたる力があるわけでもないし、混乱をまねくことになる。また市民個人の尊厳を冒し、市民社会の契約に反することで経済人としてできない。安い値段で必需品を提供しつづけ、便乗値上げをしないで補給をつづけるのが大切だ」

「市民社会の契約の精神」を私はかつて、経済史家の大塚久雄や内田義彦、政治学者の丸山真男、法学者の渡辺洋三の著作から学んだ。吉本隆明は在野の思想家・詩人として、アカデミズムには批判的であつたと聞か、明晰な論理性と批判精神は、この国のリベラルで良心的な学者の仕事に案外通底していたのではあるまいか。

【編集部註】文中、中内氏の名前表記が「巧」となっている箇所は文字変換の都合上便宜的に表記したもので正しくは、切

阪神大震災での中内の商行為を評価

薬や化粧品、雑貨が中心だったダイエーが、食料品・衣料品を拡充した三宮二号店を出したのは一九五九年四月だった。とにかく肉がべらぼうに安い。私はこの年小学校の四年生で、それまでは牛肉などめつたに口に入らなかつたが、母は私を連れて板宿から市電を乗り継ぎ乗り継ぎ、百グラム三十九円の肉を買いに行った。高度経済成長がまさに始まるうとしており、ダイエーはその上げ潮に乗って店舗を拡張した。しかし怒濤のような事業拡大は、負債を累積させ、低成長期に入るとダイエーは深刻な赤字経営に追い込まれてゆく。そして瀕死のこの帝国に引導を渡したのが、バブル経済の崩壊と阪神淡路大震災だった。

だが阪神淡路大震災におけるダイエーの獅子奮迅の活躍ぶりは、中内切の最後の輝きであろう。対応がもたつた村山政権に対して、中内の水際立った司令官ぶりは今なお語り草で、午前七時には東京浜松町のオフィスセンタービルに災害対策本部を立ち上げ、現地対策本部のメンバーを千食分の食料とともに詰め込んだヘリコプターが、午前十一時には神戸ポートアイランドに向かつて飛び立った。中内は開けられるだけの店舗をすぐに開けると命令し、兵庫県下四十九店舗のうち二十四店が、地震当日の早朝から営業した。飲料水・おにぎり・カセットコンロと、緊急を要する物品がタンクローリー二台に満載されて、福岡からフェリーで泉大津に到着したのは翌十八日の午前九時である。

中内は佐野眞一のインタビューに、「兵站」の確保という言葉を繰り返して使っている。「兵站」とは前線の部隊に武器弾薬・食料品・医薬品を補給する部署である。かの大東亜戦争で日本軍はいかに「兵站」を軽視したか。武器は敵のものを奪え。食料は現地でまかなえ。ガダルカナルやニューギニアやフィリピンで、この貧弱な思想が何十万の兵士を飢餓に追いやつたか。それはほかでもない中内自身が身をもって味わつた地獄なのだ。とにかく中内ダイエーは傘下のローソンを含めて、大震災がもたらした戦場のような混乱のなかで、緊急必需品を被災者に提供しつづけた。そしてここが大事な点なのだが、これらの物品をダイエーは無償

◆腕は

にしもとめぐみ

私の腕は折れてしまったのでなめらかな動きにはほど遠く日常生活もぎこちない肩に近い方を上腕と呼ぶ人間の腕は哺乳類の前足にあたるそうだが足の働きは腕のそれよりはるかに単純だ単純な動きはしんぼう強いのもかもしれない足は右左を繰り返して ゆっくりでも右左右左と 右左右左と 続けられれば遠くまで歩いてゆけるだろう腕はどんなに伸ばしても腕の長さしかつかめない腕が折れてしまったらもっと届かなくなる飛べるかな蝶の飛翔のように行けない所までどの春にも必ず萌葱出す新緑のように小さな芽を出す花のように伸ばしていいのだ

◆怒れる三葉虫

中嶋康雄

三葉虫は地下深く眠っていた数億年の眠りを邪魔する奴都営地下鉄、営団地下鉄三葉虫は寝起きの多足をウジャウジャ動かして五月蠅い地下鉄の窓にベタベタ張り付く最初は小さい奴がベタベタ張り付く程度子どもが「ママ、気持ち悪いよお」と泣く程度だった

三葉虫は数億年の間、その形質を進化させた棘々で、その棘に毒を持つもの非常に硬いものそして、全長二メートルを超す巨大なものそして固体数は少ないもの上記の特徴を全部兼ね備えたもの即ち、全長二メートルを超え、ダイヤモンドの次に硬く全身を有毒の塩素リン化合物の棘で覆われた三葉虫リカス類の一種

吉本隆明『ひきこもれひとりの時間をもつということ』を読んで

にしもとめぐみ

吉本隆明と言っても、私には「よしもとななのお父さんの人ね」という印象の部類である。一九二四年生まれと言ったこと、「ああ、母と同じ生まれだな」と思い、父は一つ下になるのだなと思った。私の父は今認知症を患っている。大学で独文を長く教えていた人だったが、年を取ること、死んでいく様は誰にも計り知れない。

吉本の膨大な著書と経歴を改めて思うが、この著書を手にとった時、学校という場所の「うさんくささ」に吉本流の「偽の厳肅さ」と言う言葉に納得したような気がする。「学校などというところは適当にさぼりながら何とか卒業するくらいでいいのです」「学校制度の中にいて、自分の中の違和感を大事にしていく方がいいというのです」。学校という場所は、案外まちがいがだらけの所だと思ふ。母親業をして、何年も学校にしばらく来てきた不快さ、を思う。学生時代にもたせるのは大事だ」というのです。一人でもって過す時間こそが「価値」を生むからです。子どもの時からいろいろな本を読んでいたのは、本を読んでも親がほめておいてくれたからでした。「何か勉強でもしている」と勘違いしてくれただけなのでしょう。どちらかというとひきこもりタイプだったと思う。面倒くさい思いをして人と合わせるよりも一人でいる寂しさに耐えている方が好きだった。それでもそういう風になるようになったのはある程度成長してからで、小学生くらいの時は集団や、いつも一緒にいてくれる友だちがいなくて難しいものでした。それでも高学年の時、どういふ訳か一箱のクラブ活動に入る約束をした友だちが、遠くクラブに入ってしまったって、課外学習のクラブを一人でこなしていたこともあったのです。文章を書くということも、かなり孤独で、実りのない作業だと思われるけれど、「ひきこもる」とことで、内蔵に書いてくるような言語が育つのではないかと吉本はいうのである。

家庭に流れている空気というのは、どうも、こどもに感染してしまうもの、らしい。まだ年のいかないこどもが自殺をしようというのには、親の代理死だと言っています。「傷ついた親」が「傷ついたこども」を育てる。大人は自分の傷に無自覚だから、まさか自分の性でこどもが傷ついているとは思わないのです。「もう自殺するしかない」というほどの体験をこどもが単独でするとは考えにくい、結局は親の模倣だということです。自殺願望が転移していくんですね。

家庭の中で円満で気持ちよく生きられるものなら、文学というものではなくても生きていけるのではないかともし思うし、そのように生きてけることを羨ましいときえ思うのです。

「たとえば、物書きというのは虚業で、政治家の次ぎにくだらない職業ですが、それでも持続ということが大事であることは変わらない、才能がどうこう言っても、一〇年続けないと一人前にはなれません」「文学は社会の動きとか国家とかにはあまり関係がなくて、人間の本質を描く物だと言ふ考えはかわっていません。本居宣長が『源氏物語』を評した言い方で言えば「もののおわれ」が文学の本質ということですよ」

他人から何もしないように思える、無駄な時間でも継続して持つということはそこに価値が生まれてくる。二〇〇二年に発行された一八〇ページにも満たない書物でしたが、吉本隆明の多数のスナップ写真も楽しめる著書でした。

これらが地下鉄の窓ガラスをぶち破って満員の地下鉄車内で

その無数の多足をゾロゾロ動かし走りまわる

その棘に触れた乗客は呼吸困難に陥り

喉を自ら異常の力で掻き奪って

即死する

破裂した頸動脈から

三葉虫の有毒化合物と人の血中のヘモグロビンが

激しい化学反応をおこし

有毒の臭気を噴出させ

緑の液体が

ドロドロと人体の穴という穴からしたり落ちる

三葉虫は緑の液体を全身に浴び

走る地下鉄の中

ヌラヌラと体を虹色に光らせ

動きまわる

交尾しまわる

九份

福田知子

雨 滔々と降り
特急電車に乗り遅れたひとは冬枯れの木々と同化する
ひとも季節も普通電車の速度でうごく
ふつうの時をふつうに刻んでいる
ひと
雨
電車
幽かに海の匂いがする

九份

山岳の坂の城市
ふぞろいな段幅の所どころ苔むした古い階段
赤い提灯がひとを豚に変えたトンネルのこちら側
横道に逸れた小暗い喧騒のアーケードから漏れ 滴る雨
赤黒い犬を叩き 打つ雨
——野良犬なんて 何年振りだろう

◆巡行

大橋愛由等

やがて浴びる光と同居するためにかわす言葉を蓄えておこうと連山をみているうちにこの数日夜の戸外がうるさく寝不足になっている理由が樹木の若葉たちの饒舌であるのに気づいてその生成途中の言葉の群れを少しうんざり聴いていると里の鳥たちがせつせと可視化しようとして立ち働いている姿を確認するのだった。

そういえばと語り出したその日はあの時に発語しなかったコトバを古い抽斗に潜ませたおいたのをずっと誰にも教えずにいる少女と赤を背景にしてしまったあの時以来一年のとある時季に食絶ちを続けている少女と室内に張った天幕に棲んで読み終えた書籍を食べ続けている少女は同一人物なのかどうか気になってきて藤棚のある街を歩いてみようと考えたのである。

滴る犬は雨音に溶けて長い尾を 影を曳く
影がいくつも重なると屋台の煙となって燻される
しよるり しよるり
むく ばたら
ししよりゆりしよるり
むく ばたら
淋しい落とし声

猫は姿勢を低くして提灯の際をすり抜け
屋台の裏側に消える
屋台の裏から長い尻尾を地面に這わせて半身 影になる
捨身の素早さで餌のあるほうに身を隠す
臭豆腐に塗られ沁み込んだ黴色の液体
ふりかけられ積み上げられた唐辛子の粉
カップの底に溜まり続ける黒いタピオカの反転
お寺で明日を祈るひとびとの線香の果てしない煙のあちこち
夜市の始まりを告げる仰々しい爆竹音
独特の香料が沁み込んだ胡椒餅の臭気
それらすべてを包み込み呑込む白煙
罅割れた古いアスファルトから濛々とたつ水蒸気
これらは生死の時間を過ぎ越して
なお未知の生を希求する混沌のダイナミズムのゆらぎだろうか

公園に行けば「ヴェルデは」とつぶやいている老学者がうつむいて逍遙しているのを無関心を装って通り過ぎようと思ったのだけれどその老学者がかつて巫女から愛されながらも研究の対象としてしかログスとパトスを交わさなかったことが巫女の失意を呼び「種になるわ」と云ったきり姿を消してしまいそれ以来老学者のズボンの左ポケットにはいくばくかの種がなんと棄てても入っていることを思い出したのだった。

往古の間に還りたいと発言したのが誰だったのかを思い出すためにアリオリソースをたつぷりぬり込んだバトルを食べたくなくて帰宅しようとして方向転換してしばらく歩いていると一本の小橋を渡るのに何年もためらつている翻訳者の棲んでいる街は小坂ばかりの詐術に満ちた界限であるのをいまさらながら知って新しい光がやってくる方角はきつといやおそらく西ではなく北からであるという事実を思い知るのである。

北ばかりから光が差し込むアパルトマンにずっと永い間棲んでいたのだと懐古して角の花屋を通り過ぎるとシナゴークから出てきた超正統派ユダヤ教徒の群れが滅びた

戒厳令の名残生々しい一九八九年
二・二八を語り継ぐためにきみは発った
雨や霽や峠のひとびとを巻き込んで映写機は回り続ける
わたしもまた映し出されていくつもの日本がここにもあった

いくつもの暮らしの営みもまた

——ありがとう しえしえ
手積みのお茶は芬芳の香りをただよわせて
茶器いつばいに葉をひらく
霧に煙る山河を見下ろすひらけた窓からは
春には冷たすぎる非情の風
鉄瓶から立ち上るほのかな湯気があたたかい

わたしは 何か
機微のような 呼吸のような 火のような
この城市を満たす
——何か
を見失うまいと
急須にあつい白湯を注ぎ足す

一族のことを語り合いながら花園を通り過ぎるのを見ていた二日前はたしか新月だったのだとうつらと考えその一族の見果てぬ夢は花弁となつて幾世を超えてユダヤ教徒のキツパの上にそそぐのだろうかと歩速を緩めながら想うのだった。

道学者めいて（光は深夜の連山の樹木たちの会話が朝に可視化されたものである）と箴言集に書き加えようと決めていたところ翻訳者が小橋に向かつている姿を見届けたのである少女（たち）の行方を尋ねようと思いついたものの異和異和とつぶやいて要領を得ないのでさらに朝の街を歩いていくと可視化につかれた里の鳥たちが蝟集する樹木の下を通ることになって今日の光について北の光が美麗だなどと言いついてるのを耳にしたのである。

◆ある流出

1 有時秀記

白と黒のタブローに描かれている地下世界で細胞Ⅱセルが増殖する。タブローは変化し時々刻々動く立体空間である。

ひとつひとつのセルはそれぞれ楕円状の中に黒点ももち、さらにそれらは、あたかもモグラの地下トンネルのように伸びた形状を成していて、黒点を内包したセル群の連なりがうねうねと続いている。

この群れの連なりが横列に何段階にも階層をなし、切りとおされた断崖に見られる何層もの地層のような観を呈する。

横列に走る何層かのセル群。その重層した帯を真ん中で断ち切つて、下から上へ、異質の形状帯が伸びる。形状帯の中は空洞の楕円が飛び飛びに散乱し、横列に抗して縦列に地歩を占める。楕円卵形の飛び飛びの連なりが、地から天へ、天から地へ、増殖する。この増殖ベルトはひっきりなしにうごめいているのである。

横列の帯と縦列の帯の総合形を、全体に俯瞰すると、外形は巨大な透明のガラスでおおわれ、内側は可視の状態にある。最上部と最下部には、開口部のようなものがあり、そして、ガラスの形状はらせん形にうねりながら、地から天へ、天から地へ、微かな動きを続けている。

外包のらせん状ガラス体は徐々にふくらみを増し、内包されたセル群の横列と縦列の細胞は増殖を加速する。詳らかに見れば、幾層も横へ横へと伸びた列々には、黒点を内包したセルの群れが出口を求めて、割つ

て入った空洞の異質縦列にぶつかり続ける。ぶつかりによつてもたらされるたび重なる衝撃が、何か所かに通気孔のような風穴を開け、そこからあふれた黒点内包のセルの群れが、縦列にもはきだされる。そして、ついには縦列の上にも下にも流れ出してくるのである。

らせん状ガラス体の膨張速度は内包されたセル群の増殖拡張に追いつかず、やがて、上と下の開口部からは二種のセルが群れをなして流出する。流出はおびただしくつづき、止まらずに、天と地の開口部からラッシュアワワーのごとく、疾風怒涛のごとく群れの流出が勢いを増す。

上下の開口部から流出した二種のセル群は、内包されていたうちは白と黒の色でできていたが、開口部から流出すると、色彩を帯び、紫、緑、黄、赤、青と、その混合体に変じつつ拡散する。

しかし、おびただしい流出物はどこへ拡散するのか。どこへ？ どこへ？ どこまでも？「どこへ？」

らせん状透明ガラス体の開口部からのひきもきらないセル群の流出と散乱、いまはこの全体像を明かしたことで何ものかが示唆できたはずである。あとは「像の増殖」の中にゆだね、苦渋の涙をもつて語ろう。

苦渋の涙は二種のセルの混合物でできている。内部が空洞のセル。いまひとつは内部に黒点をもつセル。この二種のセル群の混合物が苦渋の涙であり、涙の苦渋の原因はいまだ不明である。

しかし原因の解明は難問であり、このアポリアはまだ苦渋の涙をもつてしか語れないという不快さをもつ。「苦渋なき語りはとるに足りないがゆえに。パーイ！」という苦渋の声がひびく。

なにかを遮断することによつて

◆「見る・見られる」

巨大な「ゆりかご」は、夕焼けとも朝焼けともつかぬ薄もやのような色彩に包まれてただよつていて。ただよう「ゆりかご」は、ただようことによつて、次なる生成へ流転する事態の温床なのである。

ただよいの次なる生成とは？ しかし、これ以上のことは「沈黙」の中に、あるいは以後の「解釈」の中に、ゆだねよう。「語りえないものについては、沈黙しなければならぬ」というテーゼに抗して「語りえないものを語る」というアポリアに立ち向かうまでは。苦渋の涙をもつて語るまでは。

ただよいの次なる生成とは？ しかし、これ以上のことは「沈黙」の中に、あるいは以後の「解釈」の中に、ゆだねよう。「語りえないものについては、沈黙しなければならぬ」というテーゼに抗して「語りえないものを語る」というアポリアに立ち向かうまでは。苦渋の涙をもつて語るまでは。

「見る・見られる」意識は、小さな話を遠い記憶としてもつ。

小さな話の記憶とは消滅に関わることである。

世界がいちど滅んだときの話だ。核爆弾が墜ちた爆心地のように陥没した中心は、巨大な隕石で生じた凹型のクレーターになつて、空洞の花が咲いている。しかし、これは、物質の空洞ではなく、純粹に精神の空洞であるとあえて言っておかなければならない。

「私」の中心が瓦解し、「私」が永遠に瞑目したとき、世界は滅んだ。瞑目とともに「私」の六十兆個の細胞が消滅し、同時に死がクレーターとともに顕現した。しかし、どこに？ どこに死が立ち現われるのか？

「見る・見られる」意識の本質とはこのようなものであり、究極の意識の神髄がここに表わされ、まなざしの両義性そのものとなつていく。

「見る・見られる」意識は、小さな話を遠い記憶としてもつ。

小さな話の記憶とは消滅に関わることである。

「見る・見られる」意識は、小さな話を遠い記憶としてもつ。

小さな話の記憶とは消滅に関わることである。

「見る・見られる」意識は、小さな話を遠い記憶としてもつ。

小さな話の記憶とは消滅に関わることである。

「見る・見られる」意識は、小さな話を遠い記憶としてもつ。

小さな話の記憶とは消滅に関わることである。

「見る・見られる」意識は、小さな話を遠い記憶としてもつ。

小さな話の記憶とは消滅に関わることである。

「見る・見られる」意識は、小さな話を遠い記憶としてもつ。

小さな話の記憶とは消滅に関わることである。

◆美しき幽霊

世界がいちど滅んだときの話だ。

核爆弾が墜ちた爆心地のように陥没した中心は、巨大な隕石で生じた凹型のクレーターになつて、空洞の花が咲いている。しかし、これは、物質の空洞ではなく、純粹に精神の空洞であるとあえて言っておかなければならない。

「私」の中心が瓦解し、「私」が永遠に瞑目したとき、世界は滅んだ。瞑目とともに「私」の六十兆個の細胞が消滅し、同時に死がクレーターとともに顕現した。しかし、どこに？ どこに死が立ち現われるのか？

なにかが生まれる。

らせん状透明ガラス体の上下の開口部からあふれ続けるセル群は圧倒的な勢いを増してくる。流出へ向かうセル群はらせん状の透明ガラス体を振動させ、振動そのものを増大させる。無数に湧きだつてくるセル群は、ガラス体内部で圧力を増し、宙空に浮かんだような透明ガラス体は、内部からのセル群の圧倒的圧力に耐えかね、やがて壊れ、爆発したように飛び散る。

セル群の通か上空への飛散と拡散、通か下方への拡散と飛散が現象する。

壊れたガラス体の破片は飛び散りながら、円形の微粒子を構成し、おびただしい円形微粒子は、やがて円形微粒子の集団をあちこちに形づく。その集団の狭間はさまざまに、流出したセル群がまといつく。プリズムのような薄あかりの中で、狭間はさまざまにまといつくのは、超時間的意識が成せる技のようである。あたかも宇宙空間にうかぶ星雲のような形状が顕現する。

セルA、セルB、セルC…と無限につづく内部が空洞のセル群。

セルα、セルβ、セルγ…と無限につづく内部に黒点をもつセル群。

いまや円形状ガラス体の微粒子は集団の骨であり、セルA、セルB、セルC…のセルA群は、身体受容体であり、セルα、セルβ、セルγ…のセルα群は、精神受容体である。

破片から変容した円形微粒子、流出のセルA群、セルα群、

そのような三つの構成体で形成された集団は無眼への意志をもつ昏睡の中の現象である。「薄命」と「明晰」への意志を表そうとするかのような「ゆりかご」である。

人類の未来にか？ 宇宙の辺際にか？ 「今」を超えた時はさまざまにか？

幽霊がただよつていく。(夢ではない。)

瞑目の前に「私」のコアのあたりにただよつていたとおぼしい幽霊と名付けられたもの。

欠落した対象aのような事態を超えようとする幽霊。

「私」のコアと幽霊は一体であり、イメージが湧き立つ前の瞬間、光速の滝しぶきのように発生するオーロラ状の一体である。

「私」のコアは微粒子の集合体である。幽霊は流状体であるが、かの集合体の微粒子のひとつひとつに微細にまといつた超微生物の像を成した流状体である。

瞑目の前、あたかもイメージの前に発生したこの事態は、光速幽霊と名付けられた。

「私」のコアと幽霊で成り立つオーロラ状の光速幽霊体。

無ではないが無意識のまだらが光速幽霊体の性状で、死と名付けられる境界に立ち現われ、凹型のクレーターの出現とともに瞑目前の幽霊は越境する。越境者は光速幽霊体の性状をしたオーロラ状態で、イメージの湧き立つ前の事態に近似している記憶上無意識の非、物であり、非、仏である。

こうして記述された言葉群Aは、これ以降、エコーとなり、反復される響きとなる。そうして、「反復されるAは本当ではない」というのはウソである。」という言葉で締めくくられ、終わらない終わり方をする。したがって、記述者そのものの声と淡い炎のようなイメージの残滓を永久にしたたらずという永遠帰郷の蜜を垂らしつづけるのである。「ああ美しくなつたしき幽霊」という倍音をとめないながら。

◆系譜

寺岡良信

雨粒をふくんで霧が立ちのぼる

雪溪に転ぶ筈の虚言を叱るために

山脈を蒼く閉ざす季節の沈黙

芽吹かうとする樹々の喘ぎで

産褥を濡らしつづける母よ

寂しい鼻梁の系譜は

あなたたちによつて守られたから

里ではいつも残花を追ひ越して

雨季がめぐつてくる

◆四月バカ

チュン・グンサム

ところでレイン氏の家にある自動掃除機通称『ムンバ』については蟻喰が変身したのだといううわさがある。

毎日機嫌よくサバナの蟻をムシムシ食んでいた一匹の蟻喰はある朝目覚めると掃除機になっていた。今生の限り掃除機であると自覚してしまつた彼は白もの家電販売員によつて『ムンバ』と名付けられ、それは通称というより彼に与えられた固有の命名とするなら、彼は生命体としての扱いに大いに納得し、以来レイン家の床の塵芥や抜け毛や砂をムシムシと食いつづけるのだった。

ちようど床に管のような口先が当たり、平べつたい腹は床の平面や敷居のわずかな段差をもとませず這いまわることができる。ときおりレイン夫人の長すぎる髪を喉に詰まらせたり、携帯電話の充電コードを腹の奥で絡ませて絶命したふりをするにはあつたが、家族はそのたび激しく感情移入をし、「ムンバ！ムンバ！」と叫びながら、彼の円盤のような身体を抱き上げ、腹に溜まつた異物を掻き出したりするのだった。そんな時蟻喰はかつて蟻喰であつたことを忘れ、もう少しで微笑んでしまいそうになる。

だがザムザの不幸な実存を思えば虫であれ掃除機であれ変身という不条理な経緯に今日的な意味解釈は不要であろう。

レイン氏は彼の平たい背に手を当て、未消化の内容物を測ろうとする。

◆流れ

富哲世

山の鳥が電線でじゆくじゆく喉を鳴らしている
春はずかに深まり
銀杏並木も

日いちにちと若葉の緑に被われていく

わたしはきのうを失った―

すれ違う慈悲のよどみが

季節や雲を運んでゆく

充ち足りた果実の

蒼い手触りを遺して

駐車場のアスファルトをとぼとぼ横切る

小さな獣の姿がある

家々は並び

風洞は暗く冷え

霞む鳥影を見下ろして

枯れ藪は傾いだからだを伸ばしてさやく

ページを捲る

同じ景色を

それでも

生きている

気がする

◆カタブルの腕

高谷和幸

言葉と言葉の間のカタブルは建築中でにぶい音をたてている。耳はそれをなぞりながら長い昼をだぶらせていた。迷った水が身体中に波紋を広げるのも自覚的な耳で、点滴の音よりもいやしく思うようになった。名前のない天井視線では筋交いに風がひらひらして、知らない人同士が挨拶を交わす乾いた空に、棟木が苦しみぬいたシンタックスで継ぎ足されるのを見るのは目の役目だ。鴨居のくらがりには、ポルトに挟まれた守宮の子が自分の手や足を我慢していたあの頃、とろりと赤い空が見え、橋の下の水は立ち上がらないで、まだ鉛の重さで水平に光っていたのは脳だけの世界。やがて緑色の家が建ち並び、招待状を持って出かけるだろう。さても（いいえ、なぜなら……）べつしゃんこの夢のあと（見かけの）（化石）にご招待。（ここは近くからでも遠くからでも聖区ではない）。カエルが喋り、ウサギが弓をかき鳴らす言葉の位相にある音、つまりはお墓のボンネットですよ。「フランシスに薔薇（ピカビア）を」と微笑みながらカタブルの腕は死者を招き入れるのだが……できるのか？ 彼は多産すぎる。

註 「フランス語でね、屍のことをカタブルというわね。……以下略」 辺見庸著『瓦礫の中から言葉を』第6章 わたしの死者より

◆白夜光

三谷白水

冬夕焼吸ひこんでゆく四国かな

青い傘しやしらしやら当たる牡丹雪

啓蟄や窓のかたち日に日の入りて

入梅や溜息の種吐き捨てる

月の夜にはうはうと食ふ牡丹鱧

白夜光リンネの部屋の試験管

法師蟬いくぶん夏の死ぬことよ

諦観の最期に見るは濃竜胆

女童の枯れ木で書くや冬日和

玄冬や鎌研ぎにくる大鴉

◆書き手

岩脇リーベル豊美

微酔の外耳に溜まる計報は

真夜中のわたくしを慰撫する

解き放たれた時刻にだれも見せる口許が

穏やかに弛んでいる

霧中にむさぼる夢のなかの夢で

耳は貝殻となった

サナトリウムに癒える臓器

爛れた夢見の器官は癒えず

火酒壺を

小銃のように抱きしめながら眠る夜に

わたくしの身代わりとなつて

自らあの場所へと赴く秘密の書き手

予感の如実がわずかに均衡をくずし

引き金がゆたかにあなたを弑している

隠れ家へと傾くわたくしは

一瞬一瞬に秘められた結び目に

つまずきながら

ここに在ることの静謐に

陶酔の色を帯びゆく自覚がある

耳を澄ますこともなく

大橋愛由等の、「死霊」は私たちの前になかなか姿を現さない、ひとまずそう言っておいて、そこから何か言えることがないかをさがして見る。それはまず自然とひととの間を漂う声なき声となつて、爾後の地上に現れるのだが。

大橋愛由等の詩歴を語る時、自身も強くそれを言い、また誰もが認めることだが阪神・淡路大震災との関係がある。震災と詩と言えば、近代詩でまず想起されるひとりに折口信夫がいる。震災を跨ぐように書かれた歌を纏めた処女歌集「海や

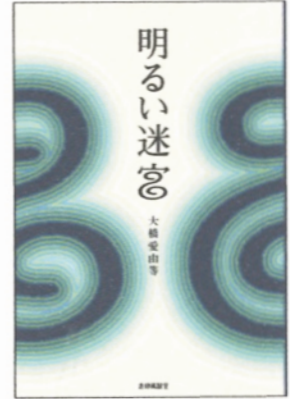
大橋愛由等の、「死霊」

詩集『明るい迷宮』 富哲世

まのあひだ」と、震災を直接の契機として書き始められたと言われる多行詩。大橋愛由等にも、「黒夜なり神戸は失せり冬の震」「イカヅチよ群赤のまち小雪舞う」などと震災を直截に形象化した句を含む処女句集「群赤の街」がまずあり(2000年刊 富岡出版)、それもおそらくは震災を跨ぐように書かれていたものだろうが、震災5年経ってまだ被災者のひとりとしてそのショックが尾を曳いていることを示していた。折口の短歌が関東大震災という未曾有の災禍に出遭いながらアラギ的な規範の解体を示していたように、神戸モダンリズムへの親近性を言い、自己意識とイメージの衝突によるエッジの鋭さを持つアクの強い

大橋俳句もまた、初めからなにか震災の爾後のない爾後に応じた、定型の器には収まりきれない葛藤を抱えていたのではないだろうか。そこには多行詩へと向かう、抑えきれない発語の動機を胚胎を窺うことができるかもしれない。一句が言い切ることだとすれば、一片の詩の終わりは沈黙へと消え入る止むことない饒舌、仮初の中断と放棄かもしれない。

俳句は「もの」に語らせるのが得意であるが、



大橋詩のなかに登場するたぐさんの物(者)たちは、そのような俳句的な背景を背負っているのかもしれない。現れ出るもののひとつひとつは、呪術的な負荷が込められた、形代のようなものとしてその背景を抜け出し、行為の主体として真昼のワルブルギユスを動いている。

大橋愛由等の多行詩は苦しい。それは荒ぶる地神がその分魂を植え付けた、地震以来抱えている心の荒び(虚無)に、詩で応えようとするものではないだろうか。それは現認の苦みであり、その詩意識は、自罰的意識と分かち難い。大橋詩の骨格

は否定構文や反語的自問の連鎖に見られるような負の気負いである。その気負いのなかで物が物を召喚し、次々に行為が行為を生み続けているが、その変転の営みを詩の一場へと支え続けているものがこの自罰の苦しみの強度であり、自己や現実世界の関係性への現認と不断の不承承なのではないだろうか。

阪神・淡路大震災より遙か昔、私はグスタフ・マイリンクの幻想小説「ゴレム」の描く古都プラハと重ね合わせて、神戸を、隠れた女神の統べる街、と夢想することがあったが、こういう意識は、もし震災さえなければきっと大橋氏と共有できたはずである。阪神・淡路の震災は大橋氏の神戸を、決して入ることの叶わない、そして日常に暗示的な(それ)への傷や亀裂をのぞかせる、カフカの「審判」の旋か「城」のような街に変えてしまったのである。デラシネの街、ひび割れの奥に死霊を匿した「明るい迷宮」II神戸と言っているだろうが、「迷宮は快樂だが塩味強い苦水(にみず)しかない」というあとがきの文言は、明るい迷宮という自らを語る「詩集の身体論」であると言える。

物として、名詞として、ここに止むことなく登場してくる、数多くの、多彩な色彩を放つ行為するものたち、それらは大橋愛由等の「器官なき身体」が紡ぐ仮象の器官の役目を担っている。

(2012年1月17日刊 書肆風羅堂)

父母の死。文學の師の死

詩集『明るい迷宮』 堀本吟

十八篇 俳句にすれば何句になるだろう、とまた、いらんことを考える。句の数が問題ではなく、これ一冊に匹敵する主題を込めた一句が成り立つものだろうか？
いつしか、共に詩歌を語り、読む仲となつて、ここに二つ、俳句と詩のテキストがそろつたので、彼の定型詩と自由な行送りの詩について、少し(メモ程度であるが)、考えてみた。

詩のテキストは今度の詩集『明るい迷宮』の中の(まだら)の句の方は、久しぶりに投稿している豈52号の十七句(『野化したばくは』)が、言葉使いやテーマ性の面から比較しやすい。

1. 詩の切れ端としてハイク

その彼の「ハイク」に、詩集の中に使われて重要な意味を持つはずの同じ語彙が見られる。「ハイク」とカタカナ語にして括弧に入れたのは、総合誌に見られる俳句とこれが、かなりちがっているからで、現在俳壇の主流にあるそれらは、この「ハイク」を決して俳句と、言わないだろう。かつて、前衛俳句が呼ばれたように、大橋の「ハイク」は現代詩の切れ端とみなされるはずである。そうそのとおり。これは、まさにキレハシ、現代詩であるとともに、現代史の・なのである。逆に、見方によっては彼のハイクは、キレハシの公然たる文学化なのだ、とも言える。

*豈五二号の十七句(『野化したばくは』)抄

弔歌のみ疵に歌いし半夏生。
朝顔がほく達の言語だった昔日
野化したてのぼくは希望を希釈する
流人王なる前世悔やみ火曜日休む
まだら男鼻歌まじりに夏至に消え
未生なら逃げるよ蜚飛ぶ先まで
虫媒した川越えの赤に夏あり
蝶の奥義測がす梅雨空の若僧
闇造りし男に水無月出会う
俳句空間―豈52(『野化したばくは』)抄

これはそれぞれ独立した一句。傍線は句と詩に共通に使われる言葉である。これらを含む十七の句をつないでいる通奏底音が作用して、どこか前衛的な連作俳句か、あるいは一篇の詩であると思われぬこともない。おそらくこの通奏底音は、詩集の全体にあるものと同質である。これらの言葉たちが、彼らによって思いつかれ形をもつた時間がこの十七年間であり、句の数はそれを象徴しているのだろう。俳句誌の同人として思うに、彼は最も自分に有効に、豈の俳句的トポスを活かしている。

* 同じ語彙が使われている詩篇

(まだら)全編。第1章所収 (傍線堀本)

雲たちは
いつのまに
弔歌の群れから
抜け出し
まだらとまだらを
行き交っている
裂かれたばかりの
風たちが
雲たちと
語り始めていた
五月は
そのすべてが
野化された

未生の沃土には
聞き手のいない
声か
彷徨い
雲たちの
さらさら
耐えている

飛べなくなつた
ツグミを見つめる
雲たちは
腎をきしませ
桎梏の日々を
繰り返し
風媒の
約束を
封印する
あなたたちよ
と語りかける
雲たちは
この日たわれる
鳥たちの
うたすべてが
弔歌

であることを知る

やがて消えゆく
鳥も 風も
しまいのうたは
越えられぬ
山向こうの
まだらである
いつまでも
肉厚の
夢を見る
雲たちの
五月は
こうして
去つたのだ。

(その一日)部分。第3章所収(傍線堀本)

朝顔の語り疲れが
ため息となり
虫媒された
赤の行方はきつと
川向こうだと
いつも思い込む昼刻
闇を作る海に
見せるつもの
天然牡丹の数をかぞえ
やがて飽きてしまう午睡前

菊花少女たちが
希望を希釈しあつては
たがい秘密しようと
フレアースカートに
告発定型文を
隠し持っている
昼下がり

(二聯略)



4月15日に神戸市内で行われた『明るい迷宮』出版記念会
会が終わって出席者全員で記念写真

詩とは本来そう言うだま
し絵の世界であるとしても、
この詩人の本当の意図が、
極私的にみじかな人への甲
歌の意味を持つているので
あれば、詩の感動はどこに
収斂してゆくのだろうか？
我々はレトリックのおよ
ばない大橋個人の悲しみの
感情にぶつかると、自分の個
人的な場合も鑑みながら、
そのわからなさを肯定しよ
うとする。いわばそれが
『明るい迷宮』という書物に
込められた、ピュアで単純
なゆえに毒のような不条理
である。

今度は、読者は、この詩
集がこんなにも明るい場所
で、こんなにもレトリカル
な言葉で悲しみをあらわ
にしている「甲歌」である
ことに気がつく。甲歌がこ
の叙情的諷刺ともなる。だが、もちろん
これは、詩の絵解きのままで「野化」を
用いて個の内面世界を造形するという、と
いう強烈な創造性が立ち上がらない。
ハイクでは、「ぼく」という主体が変容し
ている。「希望を希釈する」のは、ハイクで
は「ぼく」であるが、詩では「菊科少女」
という「野化」したものの一つであろうが、
造語が唐突に現れる。多行詩の形で「野化」
されているのは、五月の全て、もつと大き
な場所である。

彼の詩心の根底的モチーフは、多行詩に
あつてこそよく理解される、と会場でも
言われていたが、長歌の果ての短歌のよう
に、この一行の凝縮、断定の詩「ハイク」が
添えられてこそ、この詩の野は、一層の澄
明さ、混沌を本性としたトポスとして生
命を得るのである。

「野化して」の「ぼく」は希望という
毒を薄めながら生きがえようとしてい
る、という意味の「一句」がここで、棒立
ちになっている。このハイクでのメッセー
ジは抽象的にして唐突に希望に対する不安
があふれ、それ以上にも以下にもいえない
い・い。いわゆる俳壇で公認されている
俳句ではない。しかし、このような形でし
か言えないが、本質的に定型感を伴ってい
る。

野化（のか）とは新造語である。と、さりげ
なく言ったとしても、読者はそれを肯定す
るだろうか？
彼の詩集には、他にも、説明抜きの辞書
にない言葉が出てくる。それを用いながら、
叙景や叙情の纏綿がつづられているので、
読者は情に流されるときに、違和感を感じ
ざるをえない。

例えは木化。無碍の街。石蟻。風刑。果
実刑。百年刑。言触花。菊語。菊科少女。
赫髪僧
なんとなくわかるが、その言葉が、直ち
に主題になるものではないから、強い嗜好
性は感じ取れても反発されて終わるかもし
れない。かたや、お人好しの読者ならば、
あらわれ方が唐突であるのはきつと佳きネ
ライがあるのだろうか。等と
考え始め、その手中に落ち
てしまい、何か非常に変わ
った文脈の世界に乗せられ
てゆくのだ。

この詩集が、とりわけ「まだら」が孕む明
晰さと迷宮性、明るさと暗さ、このアンビ
バレンツを、うまく納得出来るかどうか、
ということにこの詩集への評価の色合いが
さまざまである。

「野化して」の僕は希望を希釈する）ま
さにそのとおり。誕生したにしてもこれ以
後の生に対する希望は、強烈なものではな
く徐々に希薄になってゆくのである。
内面のこういう撞着を詩的なテーマに載
せてきた例は、あまり多くはないのではあ
るまいか？

「野化して」の「ぼく」は「菊科少女」も「ま
だら」に形をすなわち名辞をなくしてゆく
「風」や、「雲」「闇を作る漢」も、それぞ
れの消滅を予感しながら、自らを全的にあ
らす物語を欲しているのである。詩の行
言葉の観念の運動のなかでしか生かされ
ない命もある。我々はそのことを試すた
めに「詩」というカテゴリーを獲ようとし
ている。

「句」に用いられた「野化」あるいは、「
希望を希釈する」は、前掲の二篇の詩にも
あらわれるが、喩としてあらわれているの
で、これは少しイメージが難しくなる。

例えは木化。無碍の街。石蟻。風刑。果
実刑。百年刑。言触花。菊語。菊科少女。
赫髪僧
なんとなくわかるが、その言葉が、直ち
に主題になるものではないから、強い嗜好
性は感じ取れても反発されて終わるかもし
れない。かたや、お人好しの読者ならば、
あらわれ方が唐突であるのはきつと佳きネ
ライがあるのだろうか。等と
考え始め、その手中に落ち
てしまい、何か非常に変わ
った文脈の世界に乗せられ
てゆくのだ。

この詩集が、とりわけ「まだら」が孕む明
晰さと迷宮性、明るさと暗さ、このアンビ
バレンツを、うまく納得出来るかどうか、
ということにこの詩集への評価の色合いが
さまざまである。

「野化して」の僕は希望を希釈する）ま
さにそのとおり。誕生したにしてもこれ以
後の生に対する希望は、強烈なものではな
く徐々に希薄になってゆくのである。
内面のこういう撞着を詩的なテーマに載
せてきた例は、あまり多くはないのではあ
るまいか？

「野化して」の「ぼく」は「菊科少女」も「ま
だら」に形をすなわち名辞をなくしてゆく
「風」や、「雲」「闇を作る漢」も、それぞ
れの消滅を予感しながら、自らを全的にあ
らす物語を欲しているのである。詩の行
言葉の観念の運動のなかでしか生かされ
ない命もある。我々はそのことを試すた
めに「詩」というカテゴリーを獲ようとし
ている。

「句」に用いられた「野化」あるいは、「
希望を希釈する」は、前掲の二篇の詩にも
あらわれるが、喩としてあらわれているの
で、これは少しイメージが難しくなる。

例えは木化。無碍の街。石蟻。風刑。果
実刑。百年刑。言触花。菊語。菊科少女。
赫髪僧
なんとなくわかるが、その言葉が、直ち
に主題になるものではないから、強い嗜好
性は感じ取れても反発されて終わるかもし
れない。かたや、お人好しの読者ならば、
あらわれ方が唐突であるのはきつと佳きネ
ライがあるのだろうか。等と
考え始め、その手中に落ち
てしまい、何か非常に変わ
った文脈の世界に乗せられ
てゆくのだ。

この詩集が、とりわけ「まだら」が孕む明
晰さと迷宮性、明るさと暗さ、このアンビ
バレンツを、うまく納得出来るかどうか、
ということにこの詩集への評価の色合いが
さまざまである。

「野化して」の僕は希望を希釈する）ま
さにそのとおり。誕生したにしてもこれ以
後の生に対する希望は、強烈なものではな
く徐々に希薄になってゆくのである。
内面のこういう撞着を詩的なテーマに載
せてきた例は、あまり多くはないのではあ
るまいか？

「野化して」の「ぼく」は「菊科少女」も「ま
だら」に形をすなわち名辞をなくしてゆく
「風」や、「雲」「闇を作る漢」も、それぞ
れの消滅を予感しながら、自らを全的にあ
らす物語を欲しているのである。詩の行
言葉の観念の運動のなかでしか生かされ
ない命もある。我々はそのことを試すた
めに「詩」というカテゴリーを獲ようとし
ている。

「句」に用いられた「野化」あるいは、「
希望を希釈する」は、前掲の二篇の詩にも
あらわれるが、喩としてあらわれているの
で、これは少しイメージが難しくなる。

例えは木化。無碍の街。石蟻。風刑。果
実刑。百年刑。言触花。菊語。菊科少女。
赫髪僧
なんとなくわかるが、その言葉が、直ち
に主題になるものではないから、強い嗜好
性は感じ取れても反発されて終わるかもし
れない。かたや、お人好しの読者ならば、
あらわれ方が唐突であるのはきつと佳きネ
ライがあるのだろうか。等と
考え始め、その手中に落ち
てしまい、何か非常に変わ
った文脈の世界に乗せられ
てゆくのだ。

この詩集が、とりわけ「まだら」が孕む明
晰さと迷宮性、明るさと暗さ、このアンビ
バレンツを、うまく納得出来るかどうか、
ということにこの詩集への評価の色合いが
さまざまである。

「野化して」の僕は希望を希釈する）ま
さにそのとおり。誕生したにしてもこれ以
後の生に対する希望は、強烈なものではな
く徐々に希薄になってゆくのである。
内面のこういう撞着を詩的なテーマに載
せてきた例は、あまり多くはないのではあ
るまいか？

「野化して」の「ぼく」は「菊科少女」も「ま
だら」に形をすなわち名辞をなくしてゆく
「風」や、「雲」「闇を作る漢」も、それぞ
れの消滅を予感しながら、自らを全的にあ
らす物語を欲しているのである。詩の行
言葉の観念の運動のなかでしか生かされ
ない命もある。我々はそのことを試すた
めに「詩」というカテゴリーを獲ようとし
ている。

「句」に用いられた「野化」あるいは、「
希望を希釈する」は、前掲の二篇の詩にも
あらわれるが、喩としてあらわれているの
で、これは少しイメージが難しくなる。

例えは木化。無碍の街。石蟻。風刑。果
実刑。百年刑。言触花。菊語。菊科少女。
赫髪僧
なんとなくわかるが、その言葉が、直ち
に主題になるものではないから、強い嗜好
性は感じ取れても反発されて終わるかもし
れない。かたや、お人好しの読者ならば、
あらわれ方が唐突であるのはきつと佳きネ
ライがあるのだろうか。等と
考え始め、その手中に落ち
てしまい、何か非常に変わ
った文脈の世界に乗せられ
てゆくのだ。

この詩集が、とりわけ「まだら」が孕む明
晰さと迷宮性、明るさと暗さ、このアンビ
バレンツを、うまく納得出来るかどうか、
ということにこの詩集への評価の色合いが
さまざまである。

「野化して」の僕は希望を希釈する）ま
さにそのとおり。誕生したにしてもこれ以
後の生に対する希望は、強烈なものではな
く徐々に希薄になってゆくのである。
内面のこういう撞着を詩的なテーマに載
せてきた例は、あまり多くはないのではあ
るまいか？

「野化して」の「ぼく」は「菊科少女」も「ま
だら」に形をすなわち名辞をなくしてゆく
「風」や、「雲」「闇を作る漢」も、それぞ
れの消滅を予感しながら、自らを全的にあ
らす物語を欲しているのである。詩の行
言葉の観念の運動のなかでしか生かされ
ない命もある。我々はそのことを試すた
めに「詩」というカテゴリーを獲ようとし
ている。

「句」に用いられた「野化」あるいは、「
希望を希釈する」は、前掲の二篇の詩にも
あらわれるが、喩としてあらわれているの
で、これは少しイメージが難しくなる。

例えは木化。無碍の街。石蟻。風刑。果
実刑。百年刑。言触花。菊語。菊科少女。
赫髪僧
なんとなくわかるが、その言葉が、直ち
に主題になるものではないから、強い嗜好
性は感じ取れても反発されて終わるかもし
れない。かたや、お人好しの読者ならば、
あらわれ方が唐突であるのはきつと佳きネ
ライがあるのだろうか。等と
考え始め、その手中に落ち
てしまい、何か非常に変わ
った文脈の世界に乗せられ
てゆくのだ。

この詩集が、とりわけ「まだら」が孕む明
晰さと迷宮性、明るさと暗さ、このアンビ
バレンツを、うまく納得出来るかどうか、
ということにこの詩集への評価の色合いが
さまざまである。

「野化して」の僕は希望を希釈する）ま
さにそのとおり。誕生したにしてもこれ以
後の生に対する希望は、強烈なものではな
く徐々に希薄になってゆくのである。
内面のこういう撞着を詩的なテーマに載
せてきた例は、あまり多くはないのではあ
るまいか？

「野化して」の「ぼく」は「菊科少女」も「ま
だら」に形をすなわち名辞をなくしてゆく
「風」や、「雲」「闇を作る漢」も、それぞ
れの消滅を予感しながら、自らを全的にあ
らす物語を欲しているのである。詩の行
言葉の観念の運動のなかでしか生かされ
ない命もある。我々はそのことを試すた
めに「詩」というカテゴリーを獲ようとし
ている。

「句」に用いられた「野化」あるいは、「
希望を希釈する」は、前掲の二篇の詩にも
あらわれるが、喩としてあらわれているの
で、これは少しイメージが難しくなる。

例えは木化。無碍の街。石蟻。風刑。果
実刑。百年刑。言触花。菊語。菊科少女。
赫髪僧
なんとなくわかるが、その言葉が、直ち
に主題になるものではないから、強い嗜好
性は感じ取れても反発されて終わるかもし
れない。かたや、お人好しの読者ならば、
あらわれ方が唐突であるのはきつと佳きネ
ライがあるのだろうか。等と
考え始め、その手中に落ち
てしまい、何か非常に変わ
った文脈の世界に乗せられ
てゆくのだ。

この詩集が、とりわけ「まだら」が孕む明
晰さと迷宮性、明るさと暗さ、このアンビ
バレンツを、うまく納得出来るかどうか、
ということにこの詩集への評価の色合いが
さまざまである。

「野化して」の僕は希望を希釈する）ま
さにそのとおり。誕生したにしてもこれ以
後の生に対する希望は、強烈なものではな
く徐々に希薄になってゆくのである。
内面のこういう撞着を詩的なテーマに載
せてきた例は、あまり多くはないのではあ
るまいか？

「野化して」の「ぼく」は「菊科少女」も「ま
だら」に形をすなわち名辞をなくしてゆく
「風」や、「雲」「闇を作る漢」も、それぞ
れの消滅を予感しながら、自らを全的にあ
らす物語を欲しているのである。詩の行
言葉の観念の運動のなかでしか生かされ
ない命もある。我々はそのことを試すた
めに「詩」というカテゴリーを獲ようとし
ている。

59-2012.04 大橋愛由等



吉本隆明氏
(<http://nikkidoku.exblog.jp/17206861/>)
より転載

吉本が礼賛した 島尾隊長の処置

あつた震洋
という海軍
の特攻艇部
隊を率いる
指揮官(隊長)であつた

奄美で発行されている日刊紙のひとつである南海日日新聞に興味深い記事が載っている。先の戦争中に、加計呂麻島の上空で日本軍によって撃墜された米兵についての報道である。第二次世界大戦において行方不明になった米兵の遺骨や遺品などの捜索を行なっている米国の民間団体MIAハンターズが四月に奄美を訪れた。捜査の対象となっているのは、当時21歳だった米軍海兵隊のノーマン・ウィットレッジ少尉である。この経緯はこうだ。加計呂麻島の呑之浦という集落に

の島尾敏雄である。同島上空には米軍機の襲来も多かったがなかには日本軍によって撃墜された飛行機もあった。ある日、島尾隊長は目の前で米軍機が撃墜されるのを目撃する(同島には海軍・陸軍の基地が散在していたが、島尾隊長からは発砲することはなかったという)。部下の数名に命じて探索に行かせた。するとパラシュートが開かず死亡していた米兵を発見。部隊に遺体を運んだのである。島尾隊長は米兵の名前を確認して十字架を立てアルファベットとカタカナを十字架に書き添えて呑之浦集落の共同墓地に手厚く葬ったという。

戦争が終わって一年ほど経って米軍関係者がやってきて遺骨を回収してきた。その時は集落の人たちも墓を掘り起こしたり海辺で骨を洗うなどして協力したという。しかし、MIAハンターズが事前に調べていた情報と異なっているためにまだ山中に遺骨が残っているかもしれないことを含

めてもう一度米国に帰って調査することになった。戦死した敵兵を手厚く葬るという行為は今に生きるわれわれにとつては当然のような行為に思えるのだが、吉本隆明は違った。島尾隊長を高く評価するのである。

かつて戦争のころ、(まれ人)として、また、島の守護者である武人として、奄美・加計呂麻島へ渡った島尾さんは、優にやさしい武人であり、狂信的な当時の雰囲気なかで、墜落したアメリカ兵の屍を、墓標をたてて葬ってやったほどの、しっかりとした特攻基地隊長だった。(「吉本隆明著作集9作家論」勳章書房1999)そしてこうも言っている。

今の平和で考えれば、そんなことはなんでもねえじゃねえか、今の僕ならそれくらいのことではできませんよつてことになるかもしれないけど、あの頃は冗談じゃねえよということですよ。こんなことしたら上官から何を言われる分らないし、部下からこの野郎と思われたいときもある。自分は明日特攻隊で出るかも知れないときにそれをやっているんですよ。これは偉い人だなあと思います。(「現代思想・吉本隆明特集」肯定と疎外」インタビュアー2008)

武人という立場で奄美に赴任した島尾であつたが、部隊内ではひそかに「昼行燈」とあだ名がつけられ、軍人としての猛々しいイメージはない。しかも隣りの集落に住む若き教員であつた大平ミホと出会い恋愛関係に発展しているほどの人物なので、墜落した米兵を手厚く葬ることも、生に対する本来的な優しさを持つている島尾ならではの行為として理解できそう。しかし吉本は戦前の軍色が濃密な時期であるからこそ島尾が行った弔いを高く評価して「これは偉い人だなあと思いました」と語るのである。やむなく置かれた戦争という狂気の中でも島尾が貫いた態度は時代状況を超えるものがあつた。この島尾への評価のありようが、吉本が抱く戦後評価の一端として理解できそう。そしてその立ち位置が、戦後を生きる上での生と思想の原基になつていたものであると思つている。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.70

めらんじゅ

2012年04月29日 通巻70号

月刊『Mélange』編集部発行所

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

大橋愛由等 (『Melange』同人)

Mobile 090-5069-1840

maroad@warp.or.jp

定価 500円 (税込)